

保育者・幼児教育者養成課程における

ピアノ実技指導

初心者のためのピアノ譜の読み方指導について

池田 京子

姫路日ノ本短期大学

〒679-2151 兵庫県姫路市香寺町香呂 890 番地

Piano teaching method in early childhood
educator training course

Teaching for piano beginners to understand
piano sheet music

Kyouko Ikeda

Himeji-Hinomoto College

890 Koro Koderia-Cho, Himeji-City 679-2151, Japan

1、はじめに

本学は、「幼児教育科」のみを設置している短期大学であり、毎年約50名の学生が、将来、保育園・幼稚園・認定こども園などで、保育士、あるいは、幼稚園教諭として活躍できることを目指して入学している。子どもの保育・教育に「音楽」は欠かせないものの一つであるが、残念ながら、新入生全員が音楽は得意かという点、そうではない。

そこで、現在、本学に在籍している学生85名について、入学時の状況や、現在、楽譜をどのように読んでいるのかなどを調査し、保育士・幼稚園教諭を目指す学生が、どのような指導を必要としているのかを、筆者のこれまでのピアノ実技指導経験も含めて考察する。

2、新入生の実態

現在、本学に在籍している学生85名の入学時の状況を把握するため、入学当時に実施したアンケートを改めて分析した。このアンケートでは85名全員から回答を得ている。

このアンケートは、個々の新入生のピアノ経験の程度を調査し、本学授業内で学生個別の進度に合わせた指導を実施するための調査である。これは、本学のピアノ実技に関する授業では、本学独自のグレードカリキュラムを用いた個々の学生への進度別指導を実施していることによる。

資料1：音楽経験調査アンケート

(1) ピアノの学習経験について

あなたは、これまでに、学校の授業、部活動、音楽教室、個人の先生などから、ピアノを習った経験がありますか？ ある場合は、習った場所や時期などを具体的に記入して下さい。ない場合は「なし」と記入して下さい。

【85名の回答】

- | | |
|------------------------|-------|
| ① 記入があった学生 | … 65名 |
| ② 無記入、又は、「なし」と記入していた学生 | … 20名 |

(2) あなたは、楽譜は読めますか。以下の楽譜をみて該当するものをそれぞれ一つ選んで回答して下さい。

①上の段 →

②下の段 →

※1

①上の段（ト音譜表）の音は

- ①すらすら読める
- ②迷ったり考えたりするが、読み方は知っている
- ③あまり分からない ・ 読み方は知らない

②下の段（ヘ音譜表）の音は

- ①すらすら読める
- ②迷ったり考えたりするが、読み方は知っている
- ③あまり分からない ・ 読み方は知らない

【85名の回答】

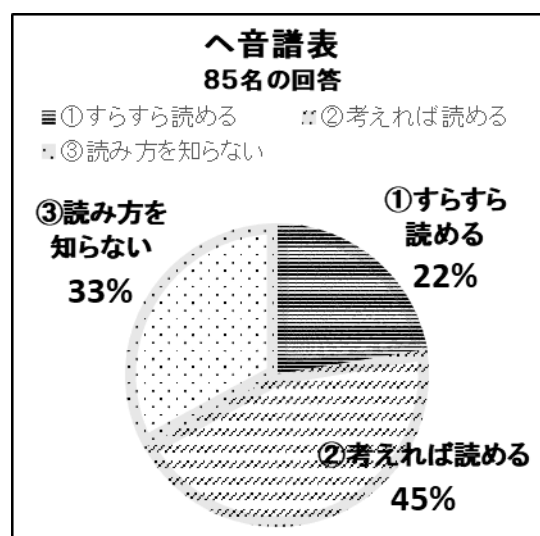
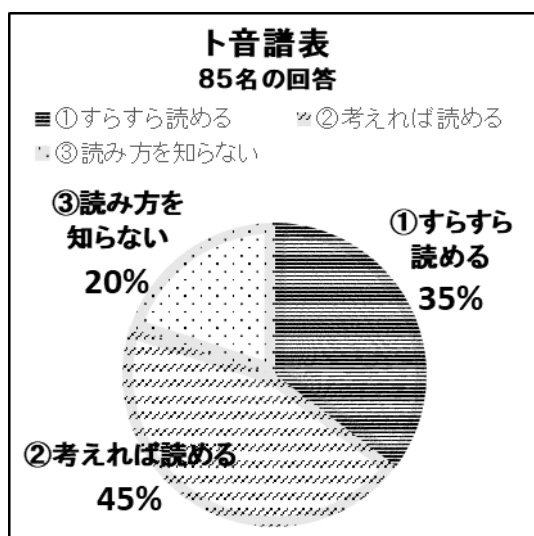
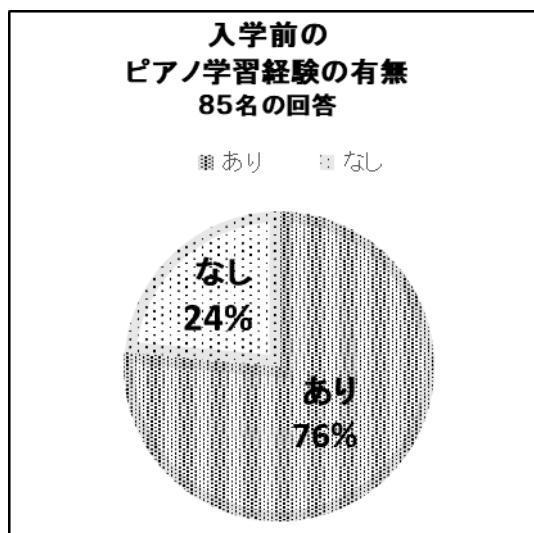
①ト音記号

- ④ すらすら読める … 30名
- ⑤ 考えれば読める・読み方は知っている … 38名
- ⑥ 分からない・読み方は知らない … 17名

②ヘ音記号

- ④ すらすら読める … 19名
- ⑤ 考えれば読める・読み方は知っている … 38名
- ⑥ 分からない・読み方は知らない … 28名

資料2：資料1の回答概要グラフ



グラフでも示されているとおり、学生全体の約4人に一人が、短期大学入学後に「初めてピアノを弾く」という状況である。また、音符が読めるかどうかについても、ト音譜表に関しては、幼稚園・保育園～高等学校を卒業するまでの間に、読む機会は何度もあったはずであるにも関わらず、学生全体の5人に1人がト音譜表の楽譜を「読めない」と回答したうえで、ピアノの学習を始めていくことになるのである。この結果に、筆者は驚くともに、大変厳しい状況であると感じている。

短期大学では、前期、後期に各15回の授業を実施しているが、学生が履修可能な年間を合わせても、授業でピアノを学習できる機会は60回しかない。そして、卒業後には、保育・教育現場で、子どもたちと一緒に歌を歌ったり、楽器あそびをしたりしなければならない。ピアノの学習を始めてから60回のレッスンで、このような仕事がこなせるようになるためには、学生の相当な努力と、練習の工夫が必要である。また、教員がどのような工夫をしながら指導するのかによっても結果は大きく異なってくる。

このアンケートは、短期大学保育者・幼児教育者養成課程における音楽教育について、教員の指導が学生に与える影響は、予想以上に大きいということを改めて感じさせられる結果でもあった。

3、「音名」と「階名」の取り扱い

(1)「音名」と「階名」

ピアノ実技を指導するためには、はじめに楽譜の読み方を学習、指導しなければならない。

「楽譜」というのは、西洋音楽を演奏するための世界共通の記号であるといえる。しかし、学生にとっての楽譜は特殊な記号の塊であり、楽譜を読むという行為は、いわば、難しい暗号を解読するようなものである。指導する際には、当然、一つ一つその暗号の意味を理解させなければならない。

仮に、指導の対象が年齢の低い子どもであれば「丸暗記させる」という方法も指導に用いることが可能かもしれない。しかし、成人になるのも近い年齢である学生に対して、楽譜に記されている数々の音符や記号の全てを丸暗記させるわけにはいかない。子どもと違って、青年期にもなってくると、頭の中でバラバラに点在している様々な知識や事柄が関連性のあるものとして結びついたり、使い分けたりすることができなければ、知識や技術の効率的な習得は難しいからである。だからこそ、楽譜に記されている音符や記号の意味だけでなく、それぞれの記号が示している事柄についての関連性や関係性も同時に理解させ、さらに、それらを学生自らが実践的に用いられるよう指導していくことが重要である。

楽譜に記されている記号には、「音部記号」「調」「拍子」「音符」などがある。なかでも「音符」は「音の高さ」や「音の長さ」を表す記号であるが、この「音の高さ」については、「音名」を用いて指導する方法と、「階名」を用いて指導する方法の2通りがある。

例えば、小学校などでは、「ドレミファソラシド」は「階名」として指導するよう、文部科学省学習指導要領で定められている。しかし、この「ドレミファソラシド」は、実は、イタリア語の「音名」でもある。保育者・幼児教育者養成課程におけるピアノ実技指導の場合は、「音名」と「階名」のどちらを用いて指導するのがよいのだろうか、考えたい。

そもそも「音名」とは、その名のとおり音の名前であるから、調性に関係なく「ド」の音はあくまでも「ド」である。したがって、「音名」とは絶対音高を表すものである。

これに対して「階名」とは、長調では「ド」、短調では「ラ」の音を主音にして、主音と音階固有の各音との距離を表す時の音の呼び方である。つまり、音の階段の段名（主音から数えて何段目の階段であるか）という意味合いが含まれている。したがって、「階名」は相対音高を表している。

ゆえに、一概に「ドレミファソラシド」といっても、「音名」として捉えるのか、「階名」として捉えるのかでは、楽譜に記されている音符の読み方が違ってくるのである。

この「音名」と「階名」をどのように使い分けるのがよいのかについては、実際の音楽指導に「固定ド」を用いるのか「移動ド」を用いるかによって、判断される。

文部科学省では、平成29年3月に告示された小学校の学習指導要領の音楽教科、小学校第1学年・第2学年の内容のなかでも、歌唱の活動を通して『階名で模唱したり暗唱したりする技能※2』を身に付けることができるよう指導することが定められている。さらに、内容の取扱いと指導上の配慮事項として、各学年の歌唱指導について、『相対的な音程感覚を育てるために、適宜、移動ド唱法を用いること。※2』が明記されている。

保育者・幼児教育者養成課程でも、同じように「移動ド」で指導するのであるならば、階名で楽譜に記されている音符を読む前に、必ず、調号を確認する必要がある。どの音符を「ド」と読めばよいのか判断する必要があるからである。つまり、学生が「移動ド」で楽譜に記されている音を正しく読めるのであるならば、調号がきちんと認識できている、ということになる。このような学生は、就職試験などで初見視奏の課題を課されても、「調号は絶対に見落とさない」という訓練ができているといえる。

また、階名は相対音高であるから、例えば、保育・幼児教育の現場で子どもたちに歌を教える場合などでは、実際の音の高さに関係なく、どんな曲でも「ドレミ…」と覚えさせることができる。正しい音程でさえ歌えれば、調号による＃（シャープ）や♭（フラット）も、いちいち気にすることなく歌うことが可能であり、歌唱指導には大変便利である。

他にも、絶対音感の曖昧な学生が音楽を聴き覚えようとする場合に、「移動ド」では、音程さえつかめれば、どんな曲かを自分で演奏して確認することが可能である。

この音程の感覚（様々な音程を感じ取れるようにすること）を育てることを目的としているのが、小学校などにおける文部科学省の教育方針である。

しかし、平成29年7月に告示された音楽教科の小学校指導要領解説にも『階名唱の場合、調によって五線譜上のドやラの位置が移動することに留意する必要がある※3』と記されているとおり、「移動ド」では、譜面のうえでもピアノの鍵盤のうえでも、調性によって、ドからシまでの間に12通りの「ド」が存在することになる。つまり、ピアノのみならず、楽器の演奏を初めて学習しようとする場合には、12通りの「ド」の弾き方を覚える必要にせまられるのである。

だからといって、これから初めてピアノを勉強しようという学生にとってのピアノは、「鍵盤が88個もある楽器」であり、「白い棒（鍵盤）と黒い棒（鍵盤）の羅列」にしか見えない楽器でもある。そのような学生に12通りの「ド」の音の弾き方を指導するのは、効果的であるとは、決していえない。

一方、「固定ド」では、「ド」の音は、譜面のうえでも、楽器の上でも、ドからシまでの間に1通りしかないため、ピアノの鍵盤の位置は「移動ド」よりも圧倒的に覚えやすい。その反面、調号があってもなくても「ド」はあくまでも「ド」であるため、初見視奏などで調号を見落とししてしまう可能性も大きい。この点は、日常的に注意しながら指導する必要がある。

（2）学生の認識

それでは、現在、本学でピアノ実技に関する授業を受講している学生は、「音名」と

「階名」をどのように認識しているのでしょうか。

2021年7月18日～7月24日までの一週間の期間を設け、本学の学生85名に記名式アンケートを実施し、63名の回答を得た。

資料3：楽譜の読み方に関するアンケート

(1) あなたは「音名」を知っていますか？【63名の回答】

- ① 知っている :55名
- ② 知らない : 8名

(2) あなたは「階名」を知っていますか？【63名の回答】

- ① 知っている :56名
- ② 知らない : 7名

(3) あなたは、音名と階名の違いは何だと思えますか？最も当てはまると思うものを一つだけ選んで回答して下さい。【63名の回答】

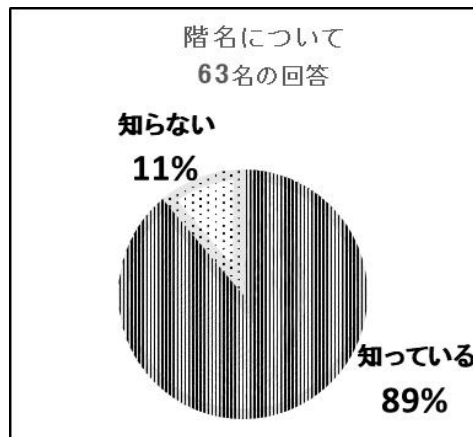
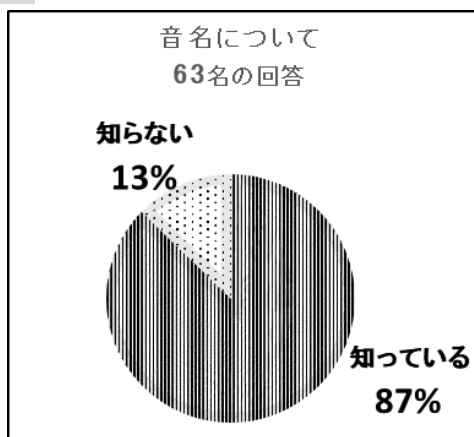
- ①「音名」と「階名」の違いは音の呼び方であり、音名は「ハニホヘトイロハ」で、
「階名」は「ドレミファソラシド」である …39名
- ②「音名」と「階名」の違いは音の呼び方であり、音名は「ドレミファソラシド」で、
階名は「ハニホヘトイロハ」である …9名
- ③「音名」や「階名」に特に違いはなく、どちらも「ドレミファソラシド」である
…回答者なし
- ④「音名」は絶対音程を表し、「階名」は相対音程を表すものである …9名
- ⑤その他
・日本語とイタリア語 … 1名
- ⑥分からない … 3名

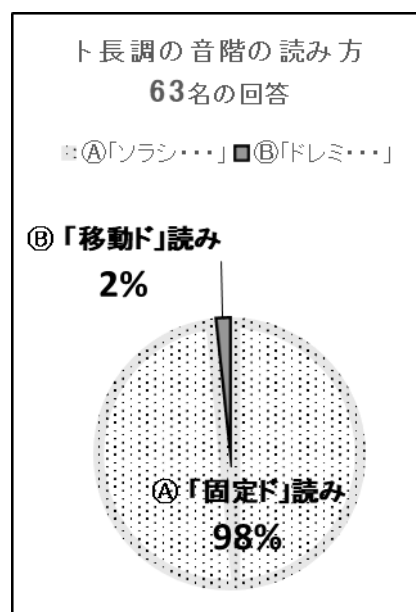
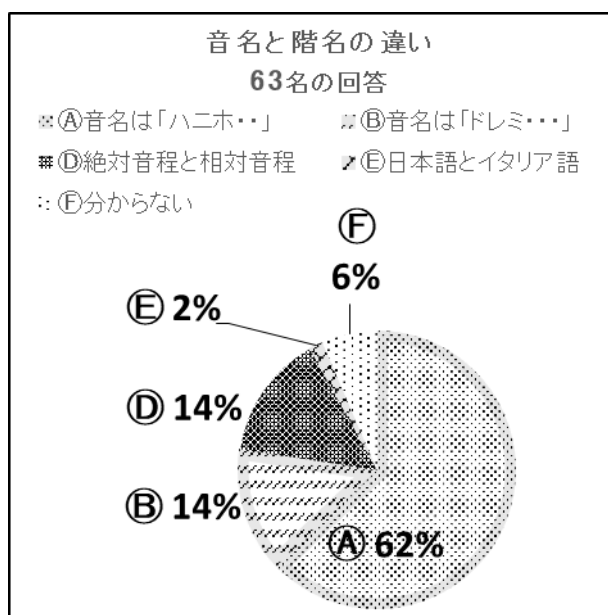
(4) 次の楽譜はト長調の音階です。あなたはどのように読みますか？【63名の回答】



- ①左からソ・ラ・シ・ド・レ・ミ・ファ#・ソ :62名(固定ド読み)
- ②左からド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ド : 1名(移動ド読み)

資料4：資料3の概要グラフ





これらの結果から、全体の90%に近い学生が「音名」や「階名」を「知っている」にも関わらず、その違いについて、①と②あわせて76%の学生が正しく理解できているとは言えない状況であることが分かった。特に②の学生は、「音名」と「階名」を混同していることがうかがえる。

また、楽譜を「階名」を用いた「移動ド」で読んでいる学生は全体のわずか2%、1名のみに過ぎず、学生のほぼ全員が楽譜を「固定ド」で読んでいるという実態が浮き彫りになった。

ト長調の音階を「固定ド」で「ソラシ…」と読むのであれば、この場合の「ソラシ…」は階名ではなく、イタリア語の音名として用いているのである。つまり、「ドレミファソラシド」を「階名」だと思い込んで「音名」として使用している学生が、数多く在籍している、ということである。

このような現状を踏まえると、保育者・幼児教育者養成課程におけるピアノ実技指導では、楽譜の読み方などを「階名」を用いて指導するよりも、「音名」を用いて指導する方が、学生の実態に合った指導を行うことができる。

4、譜読みの指導における留意事項

(1) 学生の持つ疑問

筆者は、十数年にわたって、将来、保育士や幼稚園教諭を目指す学生のためのピアノ実技指導に携わってきた。学生からは、実際に、事前に課題として与えた楽曲について、「分かりません。」「弾けません。」と質問を受けることも多い。そのなかからよくあるケースを記述する。

<ケース1> 音読みができないケース

例、

(学生) 先生、この曲はどうやって弾いたらよいのか分かりません。

(教師) 何が分からないのですか？

(学生) 「音が分かりません。」もしくは「全部分かりません。」

「とにかく何とかして欲しい」「自分には難しすぎる」ということを教師に訴えるような質問である。

このケースには、大きく分けて、④音の読み方が理解できていないケースと、⑤音を一つ一つ考えながら読むことが煩わしく感じているケースの2種類がある。

⑤のケースであれば、学生に、一音一音質問しながら楽譜を読ませ、きちんと理解できていることを評価したうえで、音読みの経験を根気よく積んでいけるような指導が必要である。

しかし、④のケースであれば、既に学習を終えたはずの「ハニホヘトイロハ」と「ドレミファソラシド」が、学生のなかで結びついていない状態である。

＜ケース2＞ 拍子が理解できていないケース

例、

（学生）先生、どうやって弾いたらよいのか分かりません。

（教師）何が分からないのですか？

（学生）リズムが分かりません。

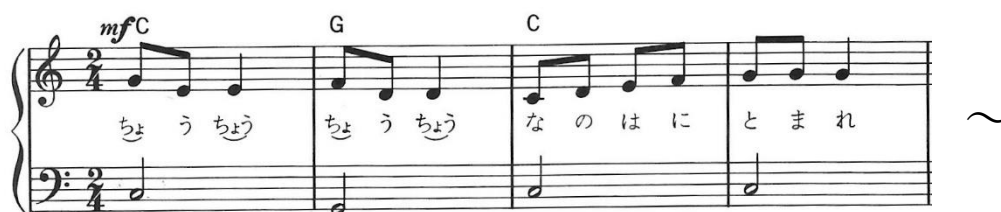
本校では、ピアノ実技の授業に、「バイエルピアノ教則本」や「こどものうた100（チャイルド社）」などを使用しており、学生に与えた課題の楽曲が、「リズムが分からない」というほど複雑なリズムの楽曲ではない場合の方が、圧倒的に多い。

このようなケースでは、そもそも拍がきちんと取れていない場合の方が多い。

それでは、こういったケースを防ぐには、どのように譜読みを指導するのがよいのか、学生が効率的に理解できる指導について、考えたい。

（2）3種類の音名

資料5：こどものうた100「ちょうちょう」※4



【資料5】の楽譜は、チャイルド社が発行している「こどものうた100」の中から「ちょうちょう」の最初の部分を抜粋したものである。

この楽譜のように、保育園や幼稚園などの子ども向け歌唱曲集では、演奏者が任意に簡単な伴奏付けができるよう、親切に工夫された楽譜が、一般的になってきている。

このような楽譜の中には、音符や記号によって3種類の「音名」が含まれている。学生には、実際に楽譜を開いて音符を読ませる前に、先ず、これら3種類の音名と、それぞれの音名が楽譜の中で示している事柄を理解させる必要がある。

楽譜に記されている3種類の「音名」とは、一つ目は、「ト音記号」や「ヘ音記号」などで用いられる「ハニホヘトイロハ」という日本語の音名、二つ目は、音符によって記

されている「ドレミファソラシド」のイタリア語の音名、三つ目は、簡単な伴奏付けのための記号であり、コードネームとして記されている「C D E F G A B C」の英語の音名である。

学生が、言語の種類によって、音名の示しているものがそれぞれに違うことを理解できれば、例えば、「ドレミ…」の中に、ト音記号の「ト」の音が一つも出てこない理由も、おのずと納得できるはずである。しかし、「これはト音記号ですよ。この線に書かれている音符がソですよ」という説明だけでは、学生は「ト音記号」と「ドレミ…」に関連性を見出せず、別のものという認識で捉えてしまう。これでは、単に知識を覚えさせているだけに過ぎない指導になってしまう。このような指導は、特に、ピアノ未経験者やピアノに苦手意識を持っている学生に対して＜ケース1＞のような状況を招きやすい。

ところで、音楽の世界では「ラ」の音が基準になっている。例えば、ピアノは「ラ」の音からピッチを合わせて調律されるし、オーケストラでは、コンサートマスターが奏する「ラ」の音を基準に、楽団員の音合わせが行われる。

英語の音名では、この「ラ」の音からアルファベット順に「A B C D…」と割り振られている。同様に、日本の音名も「ラ」の音から順に「イロハニホヘト」であり、これは、現在の「あいうえお」のようなものである。この「色は匂へど 散りぬるを…」は「いろは歌」とも呼ばれ、一文字たりとも重複している文字がないことから、平仮名を勉強するために用いられていた和歌である。この一般的に知られている和歌の最初の7文字が、音名を示す言葉として当てはめられているのである。

このようなことも説明しながら音名を学習させると、学生には「音名を3種類覚えるのは、さほど複雑なことではない」という認識を持たせることが可能となる。さらに、練習中などにコードネームから伴奏付けする音や和音を探さなければならない必要にせまられても、いちいち誰かに質問したり調べたりすることなく、自分で探し当てることが可能になる。コードネームとして記載されている音名は、そのコードの根音に該当するからである。

このように、短期間で楽譜を読めるようにするには、この3種類の「音名」を単に楽譜に記されている音符や記号として覚えさせるのではなく、学生自らが、日頃の練習などでも実践的に使い分けられるよう、指導していくことが必要である。

（3）数種類の異なる意味を持つ数字

楽譜には3種類の音名の他に、様々な数字がある。「音名」は言語の違いによって書かれている記号が違うため、視覚的にも識別できるが、数字はそうとは限らない。譜表内に直接的に記されている数字もあれば、目で見えて捉えることができない数字もあるからである。この「目に見えないもの」について考えたり、実践したりすることが、ピアノに慣れない学生にとって、とても分かりにくい事柄なのである。指導する際には、数字をそれぞれどのように区別すべきか、理解させる必要がある。

＜拍子と拍＞

ピアノ譜では、一般的な大譜表の中で、音部記号、調号の次に記されているのが拍子記号である。数字としては、譜表に最初に登場するのが、この拍子記号となる。拍子記号は分数によって示され、4分の4拍子、2分の2拍子、8分の6拍子など、様々な拍子がある。筆者は学生に対して、まずは4分の4拍子を用いて、分子の4拍子から先に理解させるようにしている。

そもそも、拍子とは、1小節全体の時間であり、1拍ずつの合計である。拍とは、1小節全体の時間を一定の間隔で区切ってくれる時間の目盛りである。4拍子であれば、

1小節は1拍×4であり、「1、2、3、4」と数える。これを目に見えるものに例えるなら、400mlの計量カップに100mlずつ目盛が振られているのと同じ理屈である。筆者はこれを学校の時間に例えて、「1日の授業が4時間と決められている学校に、1時間目、2時間目、3時間目、4時間目があるのと同じです。この1時間目、2時間目…に相当するのが、4拍子の1、2、3、4です。」と指導している。また、バイエル3番などを実際に学生に演奏させるときには、「チャイムが鳴ったら1時間目の授業が始まるのと同じで、『1』とカウントを始めると同時に1拍目が始まります。『2』とカウントを始めると同時に2拍目がはじまります…」と指導している。

重要なのは、「拍子」と「拍」、「全体の時間」と「時間の目盛り」という、同じ数字でも意味が異なっていることを学生が混同することなく理解出来ることである。そのうえで、学生自らが拍子や拍を練習時などに用いることがでなければ、音符やリズムを理解させることも困難になる。

<音符の種類>

さて、音符の種類についても数字なしでは指導できない。二分音符や四分音符というように音符の名前からして数字で表されているからである。

子供の頃からピアノを始めた筆者は、音符について、例えば、「四分音符はこのよう弾きます」と教えられ、当たり前のように演奏してきた。しかし、学生にも同じように指導するのであれば、やはり「丸暗記しなさい。」と言っているのと同じことになる。これでは、二年間で保育者、幼児教育者として社会に出ていく学生に対する、よい指導法だとは言えない。

例えば、全音符は4拍延ばす音符であり、4分の4拍子であれば、1小節の拍を「1、2、3、4」と数えている間、全ての時間を伸ばす、と指導するのが一般的である。二分音符は2拍延ばす音符であるので、バイエル4番のように、4分の4拍子で1小節に二分音符が2つ記されている場合には、「1、2、3、4」と数えるうちの「1、2」の間の2拍は1拍目に記されている二分音符を演奏し、「3、4」の間の2拍は3拍目に記されている二分音符を演奏する、というように指導するのが一般的である。しかし、ピアノ初心者にとっては「拍」という言葉は聞き慣れない語句であるため、学生によっては単なる数字の羅列にしか感じられず、スムーズに理解させることが難しい。

そこで、筆者は、全音符については、1小節全部延ばすから全音符であることに着目し、「毎日、4時間授業がある学校に来て、1時間目から4時間目まで『全』部、同じ教科を学習し続けるのが『全音符』です」、と指導している。同じように、二分音符は1小節を二等分する長さの音符であるので、「学校の1日4時間の授業時間を『二』等分して、1、2時間目と3、4時間目でそれぞれ2時間ずつ学習するのが『二分音符』です」、四分音符では「学校の1日4時間の授業時間を『四』等分して、1時間目、2時間目、3時間目、4時間目と区切って、それぞれ1時間ずつ学習するのが『四分音符』です」、というように指導している。このように、学生に身近な言葉を用いて指導すると、実際に演奏する時には、「1、2、3、4」と拍をカウントしても、学生は「1時間目、2時間目、3時間目、4時間目」に該当するものであることを認識しながら拍を感じることが可能になる。

また、音符の種類は音を鳴らすタイミングを示すものでもあることも、同時に認識させる必要がある。1小節全体の時間があって、初めて「弾くタイミング」が存在するのであり、さらに、「拍」という「時間の目盛り」があることで、よりいっそう「弾くタイミング」を計りやすくなるのである。このことを学生が理解できれば、学生は、自ら正しい弾き方を見出していくことが可能となり、前述の<ケース2>のような状況を減らすことができる。

このように、学生には、日頃の聞き慣れない言葉に配慮して、分かりやすい言葉で、拍子と拍、音符の種類による長さとの、それぞれの関係性を学生自らが実践で確認しながら練習できるよう、指導することが大切である。

<指使い>

楽譜を読むうえでもう一つ記載されているのが、音符のすぐ上や下に記されている数字、指使いである。楽譜には拍子も数字で記されているが、拍子と指使いは、同じ数字でも表しているものは全く別のものなのである。また、指使いと音の高さが別のものであることも指導時に押さえておきたい。

実は、バイエル3番～31番までは、「ドレミファソ」の音のみを用いた楽曲であるため、例えば右手であれば、「ド」の音が出てくるたびにいつも1の指（親指）でピアノを弾くことになる。これは、バイエルが、初めてのピアノ学習者に鍵盤の「ドレミファソ」を弾くときの手のポジションを習得させるために配慮された教材であるがゆえのことなのであるが、これを逆手にとって、「1＝ド」というように、指使いの番号で音を覚えようとする学生が時々いる。これでは、その学生にとっては、その先も「ドレミファソ」しかピアノの弾き方を習得できないことになってしまう。

このようなことにも留意しながら、数字が表すそれぞれの意味を、学生がきちんと区別して使い分けていけるよう指導することが、譜読みの指導において重要である。

（4）縦軸と横軸の存在

前述の（2）、（3）では、楽譜に記載されているそれぞれの項目について触れてきたが、これらを合わせて全体的に楽譜を認識させることも大切である。

楽譜を読む行為は、算数や数学で学習するグラフを分析する行為と似ていると、筆者は考えている。なぜなら、ほとんどのグラフに縦軸と横軸があり、ある事柄についての結果や決められた要素を比較・分析できるように作成されるからである。

ピアノ譜の場合は、縦軸はハーモニーを表し、その時、演奏すべき音や保続する音などが分かるように記されている。横軸は時間を表す。拍子を周期とした拍という時間の目盛があり、この目盛りによっていつ音を鳴らすのか、いつまで音を鳴らしておくのか、いつ音を離すのか、ということが全て分かる仕組みである。また、横軸は、音の移り変わりも表している。縦軸が横に結びついて流れていかなければ、メロディーや和音の進行などを認識することはできない。ましてや音楽を表現することは不可能である。

そもそも、幼稚園や保育園で学習する音楽は「表現」として、子どもたちに親しみをもって音に触れたり経験したりできるようにすることが目的である。そのためには、保育士や幼稚園教諭が、音楽を表現できる技術や経験を取得している必要がある。養成課程としての音楽関連の授業では、そういったことに配慮しながら、学生の音楽知識や技術を取得できるよう、配慮が必要である。

5、おわりに

ピアノは、ごくありふれた楽器であるが、実際に演奏するための知識や技術の取得には、他の教科にはない特殊な要素が必要である。それだけに分かりやすい指導や、効果的な学習計画が、より求められている教科だといえる。

筆者にとって、楽譜は、目で見ることのできない、「音」による楽曲の設計図でもあり、とても合理的な方法で記されていると感じている。この魅力を、学生自らの「興味・関心」事項として引き出せるよう、今後も、指導法を工夫していきたい。

<本文中の引用・楽譜>

- ※1 標準バイエルピアノ教則本 第66番より／全音楽譜出版社
- ※2 小学校学習指導要領「音楽」 p117、p126より／文部科学省 平成29年3月告示
- ※3 小学校学習指導要領解説「音楽」 p33
- ※4 こどものうた100 「ちょうちょう」より 小林美実監修／チャイルド社

<参考文献>

平成29年改訂幼稚園学習指導要領／文部科学省平成29年3月31日告示
平成29年改訂幼稚園学習指導要領解説／文部科学省平成30年2月告示
小学校学習指導要領（平成29年告示）／文部科学省平成29年3月告示
小学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編／文部科学省平成29年7月告示
保育所保育指針／厚生労働省平成29年3月31日告示
保育所保育指針解説／平成30年2月
音楽大事典／平凡社
子どもと音楽第10巻音楽の基礎知識／同朋舎
最新ピアノ講座第2巻世界のピアノ教育とピアノ教本／音楽之友社
楽典—理論と実習 石桁真礼他著／音楽之友社
ピアノ奏法のヒント 徳末悦子著／音楽之友社
標準バイエルピアノ教則本／全音楽譜出版社
こどものうた100 小林美実監修／チャイルド社

2021年7月31日
池田京子